

〈天才も苦悩する〉

ジャーナリスト  
松本 侑壬子

スイス出身のアルベルト・ジャコメッティの彫刻は、一度見たら忘れられない。その極端に縦に引き延ばされたか、肉を削ぎ落とされたかのような彫刻の印象は強烈だ。没後半世紀を過ぎても、生前からの世界的名声はますます高まり、二〇一七年、東京で開催された展覧会の盛況ぶりも記憶に新しい。

彫刻といってもギリシア彫刻どころか、むしろその真反対で、形そのものも、また彫刻の表面もギザギザとひっかき傷や凸凹だらけで、とても滑らかな肌などとは程遠い。絵も多く描いているが、直線や太い線のアクセントの強い人物像は、ひと目で見る者の記憶に強烈に刻まれる。

いったいどこからこんなアイデアが生まれるのだろうか。どのようにして制作されるのだろうか。

この映画は、ジャコメッティのモデルとして画室で一枚の画の制作過程の

すべてを目撃したアメリカ人美術評論家の体験記をもとにしている。

一九六四年、パリ。アメリカ人作家で美術評論家ロード（アーミー・ハマー）は友人のジャコメッティ（ジェフリー・ラッシュ）に画のモデルになってくれるように頼まれる。世界的アーティストからの依頼とあってロードは快諾、翌日路地裏の狭いアトリエにやって来る。たった一日の約束ははずだったが、来る日も来る日も画は完成しない。ジャコメッティは髪を掻きむしり、うめき声をあげ、なかなか構えた筆をキャンバスに下ろさない。やっと描き始めたと思えば、「いやあ、ダメだダメだ」と塗りつぶしてしまふ。はじめは、「天才画家でも苦しむのかな」などと観察していたが、三日経ち、四日経つうちに、ロード自身が苦境に。ニューヨークで待つ恋人の電話の声が日に日に険悪になる。自分自身の仕事もそんなに

放っておけない……。だが、画家本人は、制作中に恋人の娼婦がアトリエにやって来ると、仕事はそっちのけで急にウキウキ。今日はこれでオシマイなんて一緒に出かけて行ってしまつたり。「何なんだこれは。あなたは本当に天才なのか」と叫び出したいのをぐっとこらえてアトリエに通い続けるのだが……。

埃だらけの雑然たるアトリエにまるで不似合いな身なりの良いハンサムな美丈夫ロードが座り、ジャコメッティの指示に従ってポーズを取る。「人間に見える通りにとらえる」ことに没頭したといわれるジャコメッティだが、休憩時間にキャンバスを見るロードの複雑な顔。巧まざるユーモアとともに、芸術家とモデルのまるで一騎打ちのような緊迫した関係が伝わってくる。この画がジャコメッティの最後の肖像画となった。

ロードは結局一八日間モデルを務めたのだが、それ以前にも五年間に二三〇日間もジャコメッティのためにアトリエの小さな椅子に座り続けた人物がいた。日本人の親友、矢内原伊作（詩人・作家）で、本作にもちらりと顔をみせている。ジャコメッティ役のラッシュのあまりにも人間臭い天才ぶりが見事だ。苦悩も身勝手もむべなるかな。



『ジャコメッティ 最後の肖像』

イギリス映画 (90分)

監督：スタンリー・トゥッチ

出演：ジェフリー・ラッシュ、アーミー・ハマー、クレマンس・ポエジーほか

公開中

©Final Portrait Commissioning Limited 2016